

真の教育とは

言うまでもないことだが、「学問の出来る人間が立派な人間で、出来ない人間はだめな人間だ」とは私は考えていない。人間の能力にはいろいろな種煩があり、その中のどれか一つ、好きで得意な分野を伸ばし、その力で世の人々に貢献できる人間が立派な人間だと思っている。

数学が最も好きで、その面ではだれよりも優れているなら、他の何か不得意でもよいではないか。野球が最も好きで、その面でだれよりも優れているなら、他の何か不得意でもよいではないか。

個人個人がその最も得意とする、最も好きた面を磨いて、その面における競争相手に大差をつけるべく努力するよう指導してやることが、ほんとの教育だと思う。

学問が不得意で、学問するのが嫌いな人間を無理に大学まで進学させることなど、どう考えたって教育の理想ではない。それよりも学問に不適格なら不適格だと、出来るだけ早い時期に発見することに

努めると共に、その最も得意とする道を早く発見してやり、学問に早く見切りをつけて、得意な道に専心できるように指導してやることの方が、理想に近いであろう。

「鳶が鷹を産む」という諺がある。鳶の子を鷹にすることが教育の理想のように考えられているが、これも私には賛成できない。鳶の子は鳶の子でいた方が、親も子も幸福であり、社会も平穏である。鳶の子が鷹になったら、楽しい親子の会話、共通の話題がなくなるに決っている。

それに何より努力しても、鳶が鷹になることはなかなか出来ることではない。不可能に近いこと、また可能であっても決して望ましいことではないのに、それが望ましいことであり、望んで努力すれば可能であるようなことを言うものだから、教育が過熱し、試験地獄だの、乱塾などが起こるのである。